神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

On the perception of social consensus in the intergroup context

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2006-06-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 田村, 美恵, Tamura, Mie
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/644

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

集団間状況下における合意性推定

田　村　美　恵

はじめに

ある特定の行動や態度，判断などに関して，人々はどのようにして「合意性」――それらが他の人々とどのように共有／合意されているのかについての割合――を推定するのだろうか。従来の研究が明らかにしてきたのは，我々がしばしば，合意性を歪めて推測しがちであるということである。例えば，合意性に関する先駆的な実証的研究であるRoss, Greene, & House（1977）は，人が，自分自身の行動や判断，選択などについての合意性を（そのような行動や選択などを行わなかった者よりも）過大に推定するという現象――false consensus効果（以下，FC効果）――を見出している。このことは，我々が，自分自身の反応を“比較的一般的で適切なものと見なす一方で，それ以外の反応を，一般的でなく逸脱していて不適切であると見なす”傾向を意味している（Ross et al, 1977, p.280)。言い換えれば，人は，自分自身の行った「個人的な」反応を過度に一般化／正当化し，「他者」にまで投射（projection）しようとするのである。

FC効果（より一般的には「社会的投射」）に代表されるようなこうした合意性推定のあり方は，ステレオタイプ的態度の形成（Krueger, 1996)，政治的認識や投票行動のあり方（Granberg & Brent, 1983; Quattrone & Tversky, 1984)，消費者行動の予測（West, 1996)，対人的コミュニケーション（Nickerson, 1999）などといった諸々の事柄に，広範囲に影響を及ぼすことが見出されている。

ところで，従来の研究においては，どのような状況下でどのような合意性推定が行われるのか，その推定のあり方を左右しうるさまざまな要因が明らかにされてきた。そこでは，FC効果とは逆の現象，すなわち，自分自身の選択的行動や判断に対する合意性を過小に推定するという「false uniqueness効果」（以下，FU効果）も見出されるなど，数多くの知見が積み重ねられてきている（for reviews; Marks & Miller, 1987; Mullen, Atkinson, Champion, Edwards, Hardy, Story, & Vaderklok, 1985; Mullen & Hu, 1988）。

本稿は，こうした知見の重要性を軽視するものでは決してないが，しかし，問題となるのは，これらの研究のほとんどが，推定者（被験者）の所属する「内集団」のみを対象として，特定の行動や判断に対する合意性を推定させているという点である。そこでは，単一の集団（内集団）の存在しか想定されていない。具体的には，よく用いられる集団カテゴリーとして，被験者の所属する「この大学の学生」や「一般の学生」，または「友人」や「この国の人々」といった類のものが挙げられる。

しかし，こうした，いわば“等質的で差別化のない社会的文脈”（Spears & Manstead, 1990, p.85）は，現実の社会的状況を代表しているものとは言い難い。現実には，多種多様な社会的カテゴリーが垂直的関係，または水平的関係のうちに同時的に存在し（e.g., Krueger, 1998），それぞれのサイズも異なれば，顕現性（distinctiveness）や等質性（homogeneity）も異なっている。また，それらのうちには，自分にとって「内集団」であるものもあれば，「外集団」であるものもあり，集団間の関係も，協調的な場合から対立的，競争的な場合まで多岐に渡っている。

こうしたさまざまな社会的／集団間文脈のなかでも，ひときわ重要なのは，当該集団が自分にとって「内集団であるか外集団であるか」といった要因（以下，「内集団—外集団要因」と称する）であろう（e.g., Krueger, 1998）。それは，自己を社会／集団の網目の中に位置づける重要な座標軸である

(e.g., Oakes, Haslam, & Turner, 1994) とともに，そこから，ステレオタイプや偏見，集団間葛藤といったさまざまな社会的問題が生じてくるような「源泉」でもありうる (e.g., Tajfel &Turner, 1979, 1986)。

しかしながら，上述のように，従来の合意性推定研究では，そもそも，こうした集団間文脈の重要性それ自体が看過されがちであり (Spears & Manstead, 1990)，殊に，内集団—外集団要因の検討に至っては，その研究数は，驚くほど少ない。また，それらのあいだにおいても，実験手続き上の違いもあって，その見解は一様ではない。

以上を踏まえ，本稿では，集団間文脈を構成する要因のうちでも，内集団—外集団要因の影響に注目した合意性推定研究を概観し，その問題点と今後の課題について検討を行う。

内集団—外集団要因を取り上げた研究では，通常，自己の選択的行動や判断（以下，自己判断）などを回答・選択させるとともに，内集団と外集団において，それが他のメンバーと共有されている割合（合意性）を推定させるといった手続きが用いられる。

これまでのところ，一貫した結果が得られているのは，内集団を推定対象とした場合のみである。すなわち，内集団においては，FC 効果や社会的投射現象が一貫して見出されているが，外集団においては，内集団と同様の FC 効果（または社会的投射）が見出される場合（多くは，内集団よりも小さな効果に止まる）や，それとは逆の FU 効果が見出される場合，あるいは，いずれの効果も見出されない場合もあるなど，一貫した結果が得られていない。また，そのために，先行研究間では，内集団—外集団要因が合意性推定のあり方にどのような影響を及ぼすのか，その基本的メカニズムについての説明も異なっている。

結果を左右する要因の一つは，内集団や外集団カテゴリーをどのように設定するかにあると思われるが（詳しくは後述する），この点に関して，先行研究では，実在する具体的な集団カテゴリーを使用している場合と，実験室

場面で新たな社会的カテゴリーを創設して使用する場合（最小条件集団パラダイムによる）の2つに大別される。

1．実在する集団カテゴリーを用いた研究

例えば，Granberg（1984）は，「白人集団」と「黒人集団」という人種的カテゴリーを用いて検討を行い，内集団と外集団の両方において，社会的投射現象を見出している。

彼は，米国での「人種隔離政策」に関する世論調査の結果をもとに，自己の態度（隔離政策に対する賛否を3段階評定）とそれに対する合意性推定（他者の賛否について5段階評定）との関係について検討した。その際，結果の分析に当たっては，自己態度と合意性推定の評定値との相関係数を算出し，それを「社会的投射」の指数として用いている。

その結果，「白人」の被験者は，隔離政策に強く「賛同」する者ほど，内集団（白人集団）においても「賛同者」の割合を高く推定するという社会的投射が見出された。また，こうした傾向は，内集団のみに止まらず，外集団においても同様に見出された（ただし，その傾向は，外集団においては，内集団よりも若干弱いものであった）。

なぜこのような結果が得られたのかについて，Granberg（1984）は，次のような「機能的観点」（functional view）からの説明を行っている。すなわち，人種隔離政策のもとでは，白人被験者たちは，かなり特権的な地位にいる人々であるが，こうした現状に賛同する人々が，「外集団（黒人集団）も現状に賛同しているのだ」と信じる（投射する）ことは，自集団の社会的地位を維持するという点で，理にかなっている（機能的）のだとしている。

こうした解釈は，内集団や外集団への社会的投射を，内集団奉仕的方略（group-serving strategy）の一つと捉える見方であり（Spears & Manstead, 1990），それなりに興味深いものではある。しかしながら，Granberg（1984）の研究事態は，人種隔離政策に特有の社会的事情を強く

反映したものであり，いわば“special case”（Spears &Manstead, 1990）であって，その結果や見解の一般化には限界があると言わざるを得ない。

こうした点に配慮し，Spears & Manstead（1990）は，内集団や外集団カテゴリーと合意性推定の課題（トピック）とのあいだに，特定的な利害関係が想定されにくい状況を設定し，検討を行っている。

彼らは，「男性」対「女性」や「学生集団（大学進学予定者）」対「非学生集団（大学進学予定のない者）」といったカテゴリーを用い，各カテゴリーに所属する被験者に，「テニスのウィンブルドン大会をテレビで見るか否か」や「あなたの生きているあいだに核戦争が起きるかどうか」などといった4トピックについて，内集団と外集団において，自己判断に対する合意性の推定値（他の人々も自分と同様の回答をする割合）を求めた。

その際，彼らは，社会的アイデンティティ理論（e.g., Tajfel & Turner, 1979, 1986）に基づいて，次のような予測を立てた。社会的アイデンティティ理論に拠れば，内集団—外集団という社会的カテゴリー下のもとでは，人々は，各集団内の「類似性」を強調して知覚するとともに，集団間の「差異」を誇張して知覚する傾向がある（e.g., accentuation theory, Tajfel & Wilks, 1963）。こうした傾向を反映し，合意性推定のあり方も，内集団と外集団とのあいだで「差異」を強調する方向で（内集団—外集団差異）対比的に行われ，内集団に対しては，自他の類似性を高く推定するFC効果が，外集団に対しては，それとは逆のFU効果が見出される（差異化効果）と予測したのである。

しかし，結果は，ほとんどのトピックに関して，内集団，外集団のいずれにおいても同程度のFC効果が見出され，差異化効果を十分実証するものではなかった。[1)]

これに対して，Mullen, Dovidio, Johnson & Copper（1992）は，Spears & Manstead（1991）で用いられた内集団，外集団カテゴリーが，内集団—外集団差異（差異化効果）を生じさせるほど十分に“強い”ものではなかっ

た（被験者にとっての顕現性や合意性推定トピックとの関連性が十分ではなかった）可能性を指摘し，より“強い”，すなわち，顕現性や課題関連性が高く，かつ対比的な集団カテゴリーを用いて，検討を行った。

具体的には，「保守」対「リベラル」という政治的立場に関するカテゴリーを用い，各カテゴリーに属する被験者を対象に，「アメリカ合衆国は，エストニア，ラトビア，リトアニアの独立をソビエト連邦に迫るべきかどうか」という政治的課題について，自己判断を二者択一で求め，さらに，各選択肢について，内集団と外集団における合意性の推定値を求めた（研究３）。

その結果，いずれのカテゴリーに属する被験者においても，内集団ではFC効果が見出され，外集団においては，内集団とは逆に，FU効果が見出されるという推定パターンが得られ，上述した差異化効果が示されたのである。同様の結果は，Bosveld, Koomen, van der Pligt, & Plaisier（1995）でも見出されている。

ところで，Mullen et al.（1992）の研究においては，これに先立つ研究２では，研究３とは異なったかたちの合意性推定パターン（内集団―外集団差異）が見出されている。

研究２では，「Syracuse大学の学生」対「Colgate大学の学生」という“競争的（rival）”（Mullen et al., 1992, p.426）な集団カテゴリーを用いて，内集団―外集団差異についての検討が行われた。その際，「百万ドルの寄付をどのように分けるべきか」というトピックについて，各カテゴリーに属する被験者に，「等分割（equal allocation）」と「人数比割（propotionate allocation）」のいずれを選択すべきか，二者択一で自己判断を行わせ，さらに，各選択肢について，内集団と外集団における合意性の推定値を求めた。その結果，内集団においては，研究３と同様，有意なFC効果が得られたが，外集団においては，FC効果，及び，FU効果のいずれも得られなかった。[2)]

内集団と外集団とで，このような非対称な推定パターンが見出されるとい

う現象は，例えば，Krueger & Zeiger（1993）でも得られている。

彼らは，「男性」対「女性」という性別カテゴリーを用い，各カテゴリーに属する被験者に対して，ミネソタ多面人格検査（MMPI）から選出された18個の性格特性を提示し，各項目がどれくらい自分に当てはまるかについて，「はい」または「いいえ」の二者択一で回答させた（自己判断）。また，それと同時に，内集団，及び外集団での合意性推定値（各項目について，自分と同様の回答をする者の割合）を求めた（研究１）。なお，結果の分析に当たっては，各項目における被験者の自己判断（「はい」または「いいえ」）と合意性推定値の相関係数を「社会的投射」の程度を表す指数として用いている。

その結果，社会的投射現象が見出されたのは内集団においてのみであり，外集団においては社会的投射は見出されなかったのである。[3)]

Krueger & Zeiger（1993）は，このような結果を「自己中心主義（egocentrism）」という概念で，次のように説明している。合意性推定の際には，「自己（の行った判断や選択）」に特権的，優先的な位置づけが与えられ，それをベースにして，他の人々に関する推定（投射）が行われる（e.g., Clement & Krueger, 2000; Krueger & Clement, 1994）。[4)] このような自己中心主義は，数少ない「サンプル事例」から「全体」を推定する「帰納的推論（induction）」の方法にも酷似している。この際，上述の結果のように，自己中心主義傾向が「内集団」においてしか見出されないのは，人々が，帰納的推論の使用ルール――それは，原則として，当該サンプル事例（自己判断）が得られた標本集団（内集団）にしか適用されない（e.g., Dawes, 1989）――に従っているからであり，そのために，自己中心主義傾向は，「自己」が所属していない「外集団」においては見出されない（抑制される）のだとしている。

なお，後に，Krueger ら（Clement & Krueger, 2002）は，このような合意性推定のあり方を，「自己判断」を合意性推定の際の係留点（anchor）として利用するという意味で，「anchoring」（p.221）と称している。

Krueger & Zeiger（1993）と同様の結果は，Karasawa（2003）においても見出されている。彼は，「日本人」対「アメリカ人」という人種カテゴリーを用い，愛国心やナショナリズムに関する合意性推定のあり方を検討した。その際，日本人の被験者を対象として，愛国心やナショナリズム関する13の質問項目を提示し，自己判断（各項目に対する賛否度を5段階評定）を求めるとともに，内集団（日本人），及び外集団（アメリカ人）について，合意性推定（愛国心，及びナショナリズムに関する各1項目について，他の人々が賛同／否定／中立的である割合について推定）を行わせた。その結果，内集団においては，有意な社会的投射が見出され，愛国心やナショナリズムが強い者ほど，内集団での合意性の程度を高く推定していたが，外集団においては，こうした社会的投射は見出されなかった。

なお，Karasawa（2003）においては，関心の対象は，専ら「内集団」における社会的投射現象に置かれており，なぜ，このようなかたちの内集団—外集団差異（非対称性）が生じるのかについては，積極的な考察が行われていない。

まとめと問題点

これまで見てきたように，実在する具体的な集団カテゴリーを用いた研究においては，合意性推定のあり方が内集団と外集団で異なるという「内集団—外集団差異」を見出している研究が少なくない。

このうち，内集団においてはFC効果，外集団においてはFU効果という「差異化効果」を見出している研究は，その結果を，社会的アイデンティティ理論，とりわけ，それがベースとする「社会的カテゴリー化」に伴う「集団内類似性と集団間差異の強調」（e.g., accentuation theory; Tajfel & Wilks, 1963）という考え方によって説明している。

一方，これとは別の現象，すなわち，内集団においてのみ社会的投射（もしくはFC効果）が見出されるという結果を得ている研究も少なくないが，

これについては，「自己判断」を係留点とするanchoringによるとする考え方が主流である。

これらの見解は，合意性推定に及ぼす内集団—外集団要因の影響を考える上で，一定の貢献をなし得るものではあるが，しかし一方で，「実在する集団カテゴリーを使用する」という手続きに伴う次のような問題点を含んでいることも事実である。

まず第一に，実在する集団カテゴリーに対しては，多くの場合，ステレオタイプ的イメージが存在し，それが結果にも影響を及ぼしている可能性が挙げられる（Clement & Krueger, 2002; Nisbett & Kunda, 1985; Spears & Manstead, 1990）。

例えば，Karasawa（2003）では，先述のように，外集団カテゴリーとして「アメリカ人」を用いている。Karasawa（2003）自身が指摘するように，日本人被験者にとって「アメリカ人」は，かなりはっきりとしたステレオタイプを有するカテゴリーである。このため，日本人被験者が，アメリカ人（外集団）における愛国心やナショナリズムに関する合意性を推定する際，事前のステレオタイプ（e.g., アメリカ人ならばこう考えるに違いない）が手がかりとなり，それを反映するかたちで合意性推定が行われた可能性が考えられる。

このような場合，結果の解釈に当たっては，どこまでが「内集団対外集団」という「社会的カテゴリー化」それ自体の影響に拠るのか，また，どこまでがステレオタイプの影響に拠るのか，その判別が難しく，また，結果の一般化に際しても問題が残る。

また，当然のことながら，こうした事前のステレオタイプは，外集団に限らず，自身が所属する「内集団」についても存在する場合が少なくない。合意性推定研究においては，当該トピックに対する「自己判断」が求められるが，この場合，（内集団に対する）ステレオタイプは，被験者自身が下すこの「自己判断」のあり方に影響を及ぼす可能性がある。すなわち，内集団の

ステレオタイプが一種の「集団規範」として作用し，それに自己を合わせるかたちで（合意性が高いと予め予期したものを選択するというかたちで）自己判断を行う――自己ステレオタイプ化（self-stereotyping）――という可能性も考えられるのである（Alick & Largo, 1995; Clement & Krueger, 2002）。

こうした点を考慮すれば，Krueger ら（e.g., Clement &Krueger, 2002; Krueger & Zeiger, 1993）が主張するような自己中心主義や anchoring（自己を集団全体へ投射する）という考え方は，再度，検討に付される必要も出てくるだろう（詳しくは後述）。

さらに，実在する集団カテゴリーを用いる場合には，集団メンバー間での「接触（contact）」という問題も浮上する（Clement & Krueger, 2002）。日常生活において，我々は，内集団メンバーのみならず，外集団メンバーとも接触し，コミュニケーションする機会が少なくない。そして，こうした過程のなかで，内集団メンバーや外集団メンバーに関する知識が蓄積されていく。一方，合意性推定は，想起されやすい具体的な事例に基づいて行われるので（e.g., Ross et al., 1978; Bosveld et al., 1995），実在する集団カテゴリーを用いた場合には，被験者が事前に有するこうした知識（具体的事例）の影響により，合意性推定のあり方が左右される可能性がある。極論すれば，実験場面で，どのような内集団，外集団カテゴリーを使用するかによって，その都度，結果も変わりうるということにもなりかねない。

先述したように，Mullen et al.（1992）の研究では，用いられた内集団―外集団カテゴリー（カテゴリー化の強度）が異なるのに応じて，異なった合意性の推定パターン（内集団―外集団差異）が見出されていたが（註 2 を参照），このことはまさに，実在する集団カテゴリーを用いることの「難しさ」を示すものと思われる。

以上のような問題点をできる限り克服し，内集団―外集団という「社会的カテゴリー化」それ自体が合意性推定に及ぼす影響（及びその基本的メカニ

ズム）を検討するためには，もっと別の実験手続き，すなわち，実験室場面で，被験者にとって「新奇な」内集団—外集団カテゴリーを新たに創出するといったやり方——最小条件集団パラダイム——が有効であるように思われる。

2．最小条件集団パラダイムを用いた研究

最小条件集団パラダイムの「規準」について，Tajfel, Flament, Billig, & Bundy（1971）は，①被験者間，または集団間に直接的な相互交流（face-to-face interaction）がないこと，②集団メンバーの匿名性，③集団間のカテゴリー化の際の基準と実験場面での反応測度（従属変数）とのあいだに手段的なつながり（instrumental link）のないこと，④反応測度は，被験者にとって，新奇で重要な選択肢を含んでおり，かつ，直接的な実用的価値がないこと，などを挙げている。

つまり，最小条件集団パラダイムが実現する社会的カテゴリー化の状況とは，その場限りのものであり，しかも，内集団，外集団の他メンバーに関する情報が一切存在しないという点で，被験者たちは，自分たちが「単に2つの異なる集団に属している」ということだけしか知らないような状況である。

このような状況下では，特定のステレオタイプや事前の既有知識などの影響を極力排除することが出来，したがって，内集団—外集団という社会的カテゴリー化の要因それ自体の影響について，検討することが可能になる。

しかしながら，こうした手続きを合意性推定研究に導入している研究は，今のところ，極めて少ない（e.g., Clement & Krueger, 2002; Krueger & Clement, 1996）。

このうち，最近の研究であるClement & Krueger（2002，研究1）では，被験者にとって新奇な方法—埋没図形テスト（EFT）（Witkin, 1950）を用いて，被験者を2つの集団カテゴリー（「Leveler」と「Sharpner」）に分類するというやり方で，内集団—外集団状況を作り出した。

この際，被験者は，「EFTの結果」を個別にフィードバックされ，それに基づいて，「Leveler」もしくは「Sharpner」のいずれかに分類されたことになっていた。しかし，実際には，EFTの本当の結果とは関係なく，すべての被験者が「Leveler」に分類された。また，各集団カテゴリーに対する特定のイメージが生起するのを防ぐために，被験者には，各集団カテゴリーの特性に関する具体的情報は一切与えられず，他の集団メンバー同士の直接的接触もなかった。

その後，被験者は，MMPIから選出された10項目の性格特性について，それらが自分に当てはまるか否か，二者択一で回答を求められる（自己判断）とともに，内集団，及び外集団における合意性（各項目に「あてはまる」と回答する人々の割合）の推定を行った。なお，結果の分析に当たっては，先述のKrueger & Zeiger（1993）と同様，MMPIの各項目に関する「自己判断」と「合意性推定値」との相関係数を「社会的投射」の指標として用いている。

その結果，内集団においてのみ，有意な社会的投射が見出され，外集団においては，社会的投射は見出されなかった。このような結果は，Krueger & Zeiger（1993）やKarasawa（2003）などを追認するものと言える。

さらに，同様の結果は，被験者の所属集団カテゴリーが移動（social mobility）させられた場合——最初は「外集団」であった集団が，その後，被験者の所属する「内集団」となった場合やその逆の場合——にも見出された。すなわち，社会的投射現象は，その都度の内集団に対してのみ見出され，外集団においては見出されなかったのである。

このような結果を，Clement & Krueger（2002）は，Krueger & Zeiger（1993）同様，anchoringという考え方によって説明するとともに，こうした現象（内集団—外集団非対称性）の頑健性を強調している（p.227）。

事前のステレオタイプや既有知識の影響を極力排除した「最小条件集団パラダイム」において，上述のような見解が得られていることは，一見すると，

anchoring 仮説の有力さを示しているようにも思われる。しかしながら一方で，この仮説の妥当性を疑問視するような指摘も見受けられる（e.g., Alick & Largo, 1995）。

Krueger らの研究に限らず，合意性推定に関する従来の研究の多くは，被験者自身に「自己判断」を選択・回答させている。このような自己生成（self-generated）方式においては，先述したような「自己ステレオタイプ化」の可能性が常に存在する。つまり，自分が所属する集団に関する予期（内集団ではどのような判断・選択に対する合意性が高いか）を先取りし，それに「自己」を（後付的に）合わせるというかたちで「自己判断」を選択・回答しているという可能性である（Alick & Largo, 1995）。ここでは，「集団を自己へ投射する」という因果の方向性が仮定される（Cadinu & Rothbart (1996) が指摘するように，これは，演繹的推論 deduction と酷似したやり方である）が，これは，anchoring 仮説が主張する「自己を集団へ投射する」という方向性とは，真っ向から対立するものである。しかし，自己生成方式を採る限り，その是非を実証することは困難である。

従来の方法論に内在するこうした問題点を克服し，anchoring 仮説の妥当性を検討するためには，例えば，被験者自身の「自己判断」（ポジション）を実験変数として独立に操作し，それが合意性推定のあり方とどのように連動しているのかを検討するといったやり方（e.g., Alick & Largo, 1995; Sherman, Presson, & Chassin, 1984）が有効であると思われる。また，Cadinu & Rothbart (1996) のように，自己判断と集団に関する推定のあいだの方向性を示し得るような新たな指標を開発するといった工夫も必要であるだろう。

3．今後の研究に向けて——他者情報の影響に関する検討

これまで見てきたように，従来の研究における一般的な実験手続きは，被験者に，ある事柄についての「自己判断」を二者択一で尋ね，それに対する

合意性を，内集団と外集団において推定させるというものである。その際，「自己判断」以外の付加的な情報，例えば，自分以外の他者がどのような選択を行ったのかといった情報は与えられない。すなわち，通常，合意性推定の際に，被験者が「手がかり」として利用可能な具体的情報（事例）は，唯一，「自己判断」のみである。

一方，現実場面においては，我々は，内集団や外集団に所属する自分以外のメンバーに関する情報——他者がどのような行動や判断を行ったのかについての情報（以下，他者情報）——を入手することも少なくない。そして，それらを「手がかり」にして，内集団や外集団に対する評価（合意性推定）を下すことも多い。この場合，内集団や外集団に対する合意性の推定プロセスは，具体的に，どのような道筋を辿っているのだろうか。

こうした具体的な他者情報（事例）が「社会的カテゴリー化」の下で重要な役割を果たすことは，ステレオタイプをはじめとしたさまざまな研究領域で指摘されているが（e.g., Hamilton & Gifford, 1978; Hamilton & Sherman, 1996; Rothbart & Lewis, 1996; Smith & Zarate, 1990），合意性推定研究において，この問題を実証的に検討したものは，これまでのところ皆無である。

今，仮りに，我々が，ある一人の「内集団」他者の「失敗経験」（negative performance）を目の当たりにしたとしよう。この場合，内集団や外集団全体に対する合意性推定（同様の失敗経験をする人々の割合）は，どのように行われるのだろうか。

例えば，「内集団」に対する合意性推定は，このような他者情報をベースにして行われる（e.g., Sherman et al., 1984; Dawes, 1989）（その結果，同様の失敗経験をする人々の割合を高く推定する）のだろうか。それとも，自己中心主義仮説（e.g., Clement & Krueger, 2000; Krueger & Clement, 1994）が主張するように（註4を参照），他者情報は，自己(判断）情報ほどは重視されず，内集団全体に対する推定にはほとんど影響を及ぼさないのだ

ろうか。

また，内集団と外集団とでは，合意性推定のあり方はどのように異なるのだろうか。自己中心主義仮説やanchoring仮説が主張するように，「内集団」他者の情報は，当該メンバーが所属していない「外集団」の推定には影響を及ぼさないのだろうか。それとも，社会的カテゴリー化理論（e.g., Tajfel & Wilks, 1963）が主張するように，内集団と外集団との差異が強調され，内集団と外集団とでは対称的な推定パターン（外集団においては，この内集団他者とは逆に，「成功経験」をする人々の割合を高く推定する）が見られるのだろうか。[5)]

さらに，同じく「他者」に関する情報であっても，「内集団」他者ではなく，「外集団」他者に関する情報の場合はどうであろうか。それは，内集団他者の場合と同じように作用するのか，もしくは，それとは異なった推定パターンが見出されるのだろうか。

今後，他者情報が及ぼすこうしたさまざまな影響について，集団間文脈を構成する種々の要因をシステマティックに統制しつつ，検討を重ねることで，「社会的カテゴリー化」の下での合意性推定のあり方について，より包括的な見取り図（モデル）を提示することが可能になると思われる。そして，それにより，現実場面への適用可能性が一層高まることも期待される。

また，こうした研究の方向性は，集団認知やステレオタイプ，偏見といった問題を取り扱う近接の研究領域にも，新たな視座を提供するものとなり得るだろう。

註

1）こうした結果について，Spears & Manstead（1990）は，内集団への同一視が十分でなかったために，内集団—外集団での差異化が生じにくかったという可能性に言及している。彼らは，引き続き行った第2研究において，内集団同一視の程度と内集団—外集団差異化の程度（「内集団における自己判断に対する合意性推定値」から「外集団における自己判断に対する合意性推定値」を差し引いた値）との関係

について検討した（相関係数を算出）。その結果，合意性推定の対象となった10トピックの内，「内集団同一視の程度」と「内集団—外集団差異化の程度」とのあいだで有意な正の相関を得ていたのは，2～3トピックに過ぎず，内集団—外集団差異化に対する内集団同一視の影響は，限定的なものに止まることが見出された。

2）Mullen et al.（1992）自身は，論文の中で，研究2においても，「外集団では弱いFU効果が得られた」と主張している（pp.431～432）。しかし，統計的分析の結果は，有意水準に達しておらず（Syracuse大学の被験者の外集団に対するFU効果の検定結果は，p=.3148，Colgate大学のそれは，p=.1132），客観的に見れば，「FU効果が得られた」とは言い難い。むしろ，こうした結果は，後述のKrueger & Zeiger（1993）と類似したものと位置付けるほうが妥当であろう。

ところで，興味深いことに，Mullen et al.（1992）の研究1では，研究2や研究3とは，また異なる結果が得られている。研究1では，（Syracuse大学の）「1回生」対「2回生以上」という集団カテゴリーを用いて，内集団—外集団差異についての検討が行われた。合意性推定トピックは，研究2と同一のものであったが，結果は，内集団，外集団のいずれにおいてもFC効果が見出される（ただし，外集団におけるFC効果は内集団よりも弱いものに止まっていた）というものであった。

Mullen et al.（1992）は，研究1～研究3の結果の相違を，内集団—外集団を区分する際の“カテゴリー化の強度（categorization strength）”の違いによるものと説明している。これは，「用いる集団カテゴリー（カテゴリー化の強度／状況）が違えば，さらに結果が異なる」，極論すれば，「用いる集団カテゴリーの種別によって，その都度，結果が変わりうる」という可能性を意味するものでもあり，「実在する具体的カテゴリーを用いた研究」が抱える問題点（難しさ）を明示しているものとも言える（詳しくは後述する）。

3）男性被験者の「外集団」（女性集団）に対する社会的投射指数の平均値は，r=-.09，女性被験者の「外集団」（男性集団）に対する社会的投射指数の平均値は，r=.02であり，これらの係数をZ値変換した後の検定においては，いずれの場合も，0（=相関なし）と有意に異ならなかった。

4）Clement & Krueger（2000）やKrueger & Clement（1994）では，被験者に，MMPIから選出された性格特性項目を提示し，それらが当てはまるか否かについて，二者択一で自己判断を行わせるとともに，他者判断（それは，自己判断と同一のものである場合と，異なる場合の2通りがあった）を同時に提示し，それらが合意性推定（当てはまると回答する人々の割合）に及ぼす影響について検討している。その結果，合意性推定は，他者判断よりも自己判断の方により重きを置くかたちで行われていた。こうした結果に基づき，彼らは，「自己判断」の特権性，優位性を主張している。また，このような「自己中心主義」傾向が生じるのは，自己に関連した情報がその他の情報に比べ，容易に，頻繁に活性化されやすい（e.g., Wegner & Bargh, 1998）からであり，したがって，「自己中心主義」は，ほとん

ど自動的に（不可避的に）生起するとしている。

5）特に，後者の可能性については，最近，Gawronski, Bodenhausen, & Banse (2005，研究3）の研究が，それを支持するような見解を提出している。彼らは，内集団，外集団という2つの集団が存在する「社会的カテゴリー化」状況の下で，内集団他者のポジティブ，もしくはネガティブ事例を被験者に提示し，それによって，内集団や外集団全体に対する評価がどのように影響を受けるかについて検討した。その結果，内集団と外集団に対する評価は，集団間差異を強調するかたちで，対比的に行われることを見出した。すなわち，内集団他者のポジティブ事例が提示された場合には，外集団に対する評価は，内集団よりもネガティブなものとなり，反対に，内集団他者のネガティブ事例が提示された場合には，外集団に対する評価は，内集団よりもポジティブなものとなっていたのである。ただし，彼らの研究においては，集団全体の「印象」（偏見の程度）が評定対象（従属変数）になっており，合意性推定のあり方が直接検討されているわけではない。

引用文献

Alick, M. D., & Largo, E. 1995 The role of the self in the false consensus effect. *Journal of Experimental Social Psychology,* **31**, 28-47.

Bosveld, W., Koomen, W., van der Pligt, J., & Plaisier, J. W. 1995 Differential construal as an explanation for false consensus and false uniqueness effects. *Journal of Experimental Social Psychology,* **31**, 518-532.

Cadinu, M. R., & Rotbart, M. 1996 Self-anchoring and differentiation processes in the minimal group setting. *Journal of Personality and Social Psychology,* **70**, 661-677.

Clement, R. W., & Krueger, J. 2000 The primacy of self-referent information in perceptions of social consensus. *British Journal of Social Psychology,* **39**, 279-299.

Clement, R. W., & Krueger, J. 2002 Social categorization moderates social projection. *Journal of Experimental Social Psychology,* **38**, 219-231.

Dawes, R. M. 1989 Statistical criteria for establishing a truly false consensus effect. *Journal of Experimental Social Psychology,* **25**, 1-17.

Gawronski, B., Bodenhausen, G. V., & Banse, R. 2005 We are, therefore they aren't: Ingroup construal as a standard of comparison for outgroup judgments. *Journal of Experimental Social Psychology,* **41**, 515-526.

Granberg, D. 1984 Attributing attitudes to members of groups. In J. R. Eiser (Ed.), *Attitudinal judgment,* pp.85-108. New York: Springer.

Granbeg, D., & Brent, E. 1983 When prophecy bends: The preference-expectation link in U.S. presidential elections, 1952-1980. *Journal of Personality and Social Psychology,* **45,** 477-491.

Hamilton, D. L., & Gifford, R. K. 1976 Illusory correlation in interpersonal perception: A cognitive basis of stereotypic judgment. *Journal of Experimental Social Psychology,* **12,** 392-407.

Hamilton, D. L., & Sherman, S. J. 1996 Perceiving persons and groups. *Psychological Review,* **103,** 336-355.

Karasawa, M. 2003 Projecting group liking and ethnocentrism on in-group members: False consensus effect of attitude strength. *Asian Journal of Social Psychology,* **6,** 103-116.

Krueger, J. 1996 Personal beliefs and cultural stereotypes about racial characteristics. *Journal of Personality and Social Psychology,* **71,** 536-548.

Krueger, J. 1998 On the perception of social consensus. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology,* Vol.30, pp.163-240. San Diego, CA: Academic Press.

Krueger, J., & Clement, R. W. 1994 The truly false consensus effect: An ineradicable and egocentric bias in social perception. *Journal of Personality and Social Psychology,* **67,** 594-610.

Krueger, J., & Clement, R. W. 1996 inferring category characteristics from sample characteristics: Inductive reasoning and social projection. *Journal of Experimental Psychology: General,* **25,** 52-68.

Krueger, J., & Zeiger, J. S. 1993 Social categorization and the truly false consensus effect. *Journal of Personality and Social Psychology,* **65,** 670-680.

Marks, G., & Miller, N. 1987 Ten years of research on the false-consensus effect: An empirical and theoretical review. *Psychological Bulletin,* **102,** 72-90.

Mullen, B., Atkinson, J. L., Champion, D. S., Edwards, C., Hardy, D., Story, J. E., & Vanderklok, M. 1985 The false consensus effect: A meta-analysis of 155 hypothesis tests. *Journal of Experimental Social Psychology,* **21,** 262-283.

Mullen, B., Dovidio, J. F., Johnson, C., & Copper, C. 1992 In-group-out-

group differences in social projection. *Journal of Experimental Social Psychology,* **28**, 422-440.

Mullen, B., & Hu, L. 1988 Social projection as a function of cognitive mechanisms: Two meta-analytic integrations. *British Journal of Social Psychology,* **27**, 333-356.

Nickerson, R. S. 1999 How we know-and sometimes misjudge-what others know: Imputing one's own konwledge to others. *Psychological Bulletin,* **125**, 737-759.

Nisbett, R. E., & Kunda, Z. 1985 Perception of social distributions. *Journal of Personality and Social Psychology,* **48**, 297-311.

Oakes, P. J., Haslam, S. A., & Turner, J. C. 1994 *Stereotyping and social reality.* Oxford, UK: Blackwell.

Quattrone, G. A., & Tversky, A. 1984 Casual versus diagnostic contingencies: On self-deception and on the Voter's illusion. *Journal of Personality and Social Psychology,* **46**, 237-248.

Ross, L., Greene, D., & House, P. 1977 The "false consensus effect": An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal of Experimental Social Psychology,* **13**, 279-301.

Rothbart, M., & Lewis, S. 1988 Inferring category attributes from exemplar attributes: Geometric shapes and social categories. *Journal of Personality and Social Psychology,* **55**, 861-872.

Sherman, S. J., Presson, C. C., & Chassin, L. 1984 Mechanisms underlying the false consensus effect: The special role of threats to the self. *Personality and Social Psychology Bulletin,* **10**, 127-138.

Smith, E. R., & Zarate, M. A. 1992 Exemplar-based model of social judgment. *Psychological Review,* **99**, 3-21.

Spears, R., & Manstead, A. S. R. 1990 Consensus estimation in social context. In W. Stroebe & M. Hewstone (Eds.), *European review of social psychology,* Vol.1, pp.81-110. Chichester, England: Johnson Wiley & Sons.

Tajfel, H., Flament, C., Billig, K., & Bundy, R. 1971 Social categorization and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology,* **1**, 149-175.

Tajfel, H., & Turner, J. C. 1979 An integrative theory of social conflict. In W. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations,* pp.33-47. Monterey, CA: Brooks／Cole.

Tajfel, H., & Turner, J. C. 1986 The social identity theory of intergroup

behavior. In W. Trobe & W. G. Austin (Eds.), *Psychology of intergroup relations,* 2nd edn, pp.7-24. Chicago: Nelson-Hall.

Tajfel, H., & Wilks, A. L. 1963 Classification and qualitative judgment. *British Journal of Psychology,* **54**, 101-114.

Wegner, D. M., & Bargh, J. A. 1998 Control and automaticity in social life. In D. T. Gillbert, S. T. Fiske, & G. Kindzet (Eds.), *The handbook of social psychology,* Vol.1, pp.446-496. Boston, MA: McGraw-Hill.

West, P. M. 1967 Predicting preference: An examination of agent learning. *Journal of Consumer Research,* **23**, 68-80.

Witkin, H. A. 1950 Individual differences in ease of perception of embedded figures. *Journal of Personality,* **19**, 1-15.